

こがくぼうあしかがしげうじやかたあと
0478 古河公方足利成氏館跡 古河市鴻巣 現況：公共施設地

別称：鴻巣御所、古河公方館

地図 45

古河公方足利成氏館跡は、古河総合公園内に所在する。御所沼に突き出した半島状の部分（標高 15m）が館跡とされ、半島の中ほどに土塁と堀跡が残存する。かつての御所沼は渡良瀬川につながる広大な沼であったが戦後干拓され、現在の姿は復元されたものである。館跡も本来はもう少し広がっていたと思われ、明治期の迅速測図には現存土塁の東側にも堀跡が描かれている。

鎌倉公方足利成氏が享徳 4 年（1455）に鎌倉から古河へ本拠地を移した際、当初はこの地に館を構え、享徳 7 年（1457）に完成した古河城（0479）へ移ったという。

その後天正 18 年（1590）に豊臣秀吉により古河城が破却を命じられた。最後の古河公方であった足利義氏の娘、氏姫は古河城から本館へ移り住み、氏姫と子の義親は亡くなるまでを当地で過ごした。孫の尊信は寛永 7 年（1630）に当地を離れ、下野国喜連川へ移った。（越田）

古河公方足利成氏館跡復元図 本間朋樹 2004.9.25（『図茨』より加筆して転載）



こづみじょうあと
0480 小堤城跡 古河市小堤 現況：寺社境内地、宅地

地図 46

小堤城跡は、宮戸川右岸の台地縁辺部に所在する。現在は円満寺（標高 22m、室町期に南側の寺宇家山から移転したと伝える）の北・西側に土塁と堀跡が残存しているのみだが、昭和 40 年ごろまではその外側にも長方形の堀が存在し、特に西側は二重の堀になっていたという。この西側の堀に面した県道 190 号線は鎌倉街道中道と推定されている。なお、南西部の堀は近年まで残存していたようだが、現在はない。また、円満寺の北 400m ほどの地点にも堀跡が残存しており、現道のすぐ東には土橋の痕跡も確認できる。街道を閉塞する施設であった可能性がある。

築城時期は明らかではないが、足利成氏が古河へ来た際に従っていた諫訪氏が在城したともいう。小堤は天文 23 年（1554）には古河公方家臣の野田氏の知行地として確認でき、小山氏との抗争の中で境目の城として整備されたと考えられている。（越田）

小堤城跡推定復元図 総和町史編さん委員会編（『総和町史通史編 原始・古代・中世』より加筆して転載）



ゆうきじょうあと
0486 結城城跡 結城市結城 現況：公共施設地、宅地ほか 別称：臥牛城 地図 39

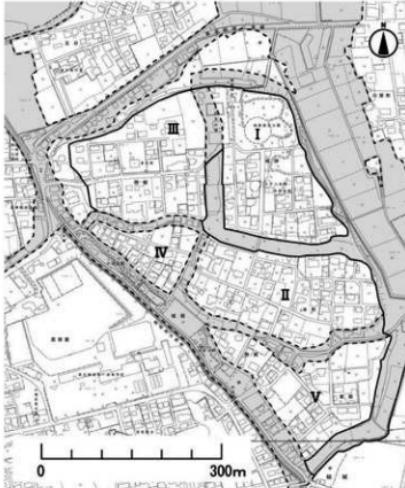
結城城跡は、結城市街地の北東部、大きく蛇行する田川に抱えられたような独立した丘陵に築かれている。城館の周囲は田川の水を引き込んで堀としており、軍記物などには「西は大河をかまえ、四方の惣堀ひろくふかけば、大船もうかぶごとなり」（『結城軍物語』）「田川の入江底深く、三方田の畔にして馬足自由ならざる池沼なり」（『結城系図』）と記されている。

城館の立地する台地は堀により曲輪 I～V に区切られ、曲輪 I の中心部の標高は 39.5m、外堀跡との差高は 8 m ほどである。各曲輪を区切る堀は曲輪 I の南や西に残存し、それ以外の部分についても江戸期の古絵図や明治期の地籍図、現況地形等から復元することができる。外堀は北東から南東部分が良好に残り、南西部は用水路沿いやや低い土地の部分が堀跡と考えられる。北西部はほとんど残っていないが、おむね現在の道路形状が堀跡を踏襲しているとみられる。

結城城は結城氏の居城で、第 16 代当主結城勝が弘治 2 年（1556）に制定した『結城氏新法度』内には「実城」「中城」「西館」「館」などの記載があり、曲輪 I が実城、曲輪 II が中城、曲輪 III・IV が西館、曲輪 V が館（東館）に相当すると思われる。また、結城城には「大谷瀬口」「北口」「南表」「西の宮口」などがあったことが『結城家之記』に見える。

曲輪 I は現在公園となっており北と東は崖、南と西の一部には堀跡が残る。曲輪 III は曲輪 I の西にあり全体に西へ傾斜し、西端に西の宮口が設けられている。古絵図や地籍図によると、曲輪 III の北側の崖下に帯状の曲輪があり、北東部（曲輪 I の北側）には北口が開かれていたことが分かるが、現状はほとんど失われている。曲輪 V は城館の南端に位置し、南東部に大谷瀬口、南西部に南表（大手）がある。

結城城がいつごろ築城されたのかは不明だが、永享 12 年（1440）に始まった結城合戦では、鎌倉公方の遺児を擁した結城氏が総勢 10 万ともいわれる室町幕府勢に抗して 1 年間戦い抜いている。落城により滅亡した結城氏は後に再興され、引き続き結城城を居城としたが、慶長 5 年（1600）の結城秀康越前移封により廢城、破却となった。その後、結城地方は元禄 13 年（1700）に水野勝長の領地となり、元禄 16 年（1703）には古城跡に新城を築くことが許可され、結城城は水野氏のもと近世城郭として復活した。なお、慶応 4 年（1868）には江戸にいた佐幕派の藩主勝知が、新政府恭順派である家臣団の籠る結城城を攻めるという異常事態も発生している。（越田）



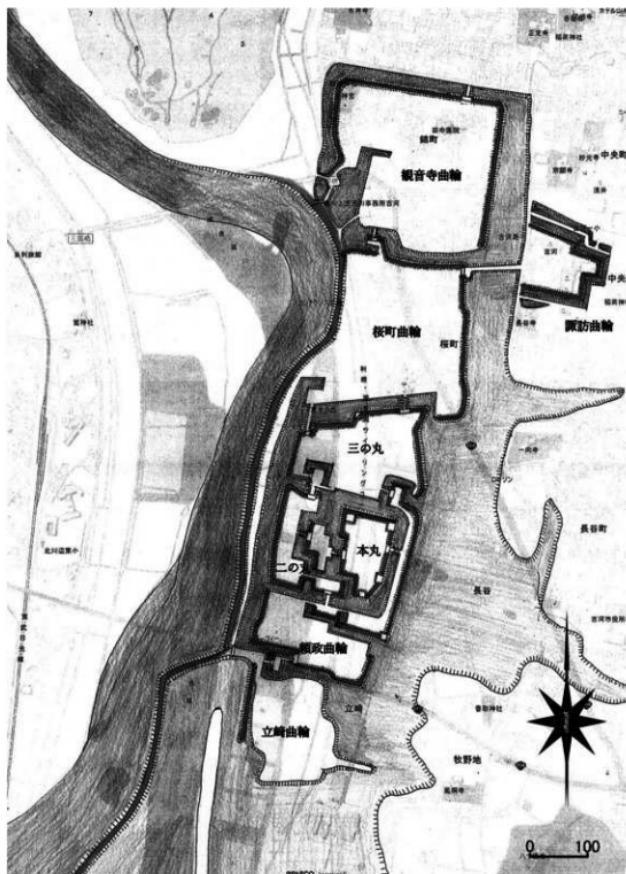
結城城跡推定復元図 越田真太郎 2022.2.6

0479 古河城跡 古河市桜町 現況：宅地、畠地、河川堤防

地図 45

古河城跡は、渡良瀬川の左岸に面した標高約14mを測る河岸段丘上に位置する。かつては、河川敷内に古河城の堀跡も確認できたが、大正～昭和期の渡良瀬川の河川改修工事に伴い現況堤防下などに遺構の大部分が埋没、湮滅した。

城の規模は、江戸時代の最終形態から最大で南北約1800m、東西約500mの範囲にわたりその



古河城跡縹張図 余湖浩一 2021.10

地勢から水運・陸運の要衝で物流の拠点として軍事上ばかりでなく、経済の中心地としても重要な拠点地であった。当初の城（居館）の実態は詳らかではないが、鎌倉時代の下河辺氏そして北条氏から足利氏に至る中世での領主支配の場としての古河城を当地に推定される。推定の域を脱せないのは、中世文献史料の不足と考古学的調査の皆無からなる。

史料上からは、後北条氏治下での永禄年間から天正年間にかけての改築工事により、軍事的な城の再整備と拡充が図られたようとされる。また、天正18年（1590）の小田原合戦後、豊臣秀吉は古河城の破却を命じているものの、その後入封した小笠原氏、松平氏、奥平氏などにより堀や曲輪の拡張、街道の整備、宿駅の開発を受け近世城郭へと改修がなされてきた。

『古河市史』によれば、「城郭は本丸を中心に各曲輪が直線に配置される典型的な連郭式で」「関東でも有数の規模をほこった城」であること。「本丸の周囲には土塁が巡らされ」「四隅に三階櫓・菱櫓・異櫓・旗櫓・平櫓が建ち」「本丸門と馬出をへて二の丸に入ると…中には二の丸御殿があり、城主在中の居所となったほか、將軍日光社参のさいの宿所にもあてられた」。「二の丸門を出ると三の丸で、…明地として馬場が設けられていた」「この本丸へ三の丸を包むようにして、東帶曲輪と西帶曲輪があり、東帶曲輪の南端には涼櫓が設けられている」「本丸の南側には二の丸と結ばれて頼政曲輪と立崎曲輪が」あり、「三の丸の北側には桜町曲輪と觀音寺曲輪・諏訪曲輪などがあった」。「桜町曲輪内は丸の内と通称され、…重臣の屋敷と」なり、「觀音寺曲輪や諏訪曲輪も同様で、諏訪曲輪は城代土井氏の屋敷にあてられていた」とある。（大谷）

やまかわやかたあと
0488 山川館跡 結城市上山川 現況：寺社境内地

別称：東持寺境内遺跡、地頭屋敷

地図 39

山川館跡は、鬼怒川右岸の平地上にある曹洞宗東持寺の境内に所在する。結城氏の有力な一族である山川（山河）氏の本拠と伝わる方形居館跡で、中軸線での規模は南北 195m、東西 147.5m、中心部の標高は 32.1m である。四方を堀と土塁で囲まれ、堀幅は 5.4m、土塁幅は 12m。土塁は北東角と北西角が高くなってしまっており、南と西に開放部がある。このうち西側は後に開けられたものと想定されており、南側が虎口と考えられ、以前は北側にも跳ね橋があったと伝えられている。また、境内には正和 6 年（1317）銘の大型板碑が所在する。

城館の北西約 700m には結城庵寺が所在し、東方約 300m には近代まで栄えた鬼怒川の上山川河岸があった。さらに、城館から南にまっすぐ延びる馬場と呼ばれる道沿いには中世の大型五輪塔が残存する薬師堂や觀音堂があり、中世的な景観を良好に残している。なお、山川氏の本拠は『結城市史』によると、永禄 9 年（1566）以前に南西約 3.5km にある山川綾戸城（0487）へ移されたと考えられており、東持寺は文亀 3 年（1503）に上山川原に諏訪神社別当として山川朝貞により建立された寺院が、寛永 3 年（1626）に移転してきたものという。（越田）



山川館跡測量図 結城市教育委員会
（『城の内遺跡 II』より加筆して転載）

やまかわあやとじょうあと
0487 山川綾戸城跡 結城市山川新宿 現況：宅地、畠地、水田

別称：山川城、あやどうのたて

地図 46

山川綾戸城跡は、山川沼に突き出した舌状台地の先端部を利用して築かれており、曲輪Ⅰ中心部の標高は 25.7m である。現在の山川沼は近世以降の干拓により水田化しているが、中世には「彼地（山川綾戸城）三方沼ニ候間、海船數多被入被取候」と記される状況であった。

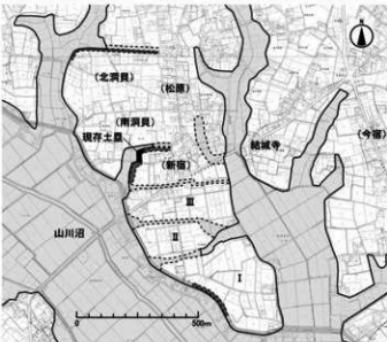
結城氏の有力な一族である山川（山河）氏の居城で、北東約 3.5km にある山川館（0488）から本拠を移したと考えられており、築城時期は詳らかではないが『結城市史』では永禄 9 年（1566）以前とする。天正 5 ~ 6 年（1577-78）の後北条氏による結城・山川侵攻の際に攻撃を受けており、特に天正 6 年には「山川戸張宿城無胎被取破、生城計ニ候」という状況にまで追い込まれるが、佐竹氏を中心とする東方之衆の出陣により後北条氏が兵を引き、落城を免れている。慶長 6 年（1601）に山川氏が転出すると、幕府直轄領、松平定綱領を経て元和元年（1615）に水野忠元が入封する。忠元は曲輪Ⅲを新たに本丸として城郭と城下の整備を進めたとされ、寛永 12 年（1635）忠元の子の忠善駿河移封のあとは陣屋として利用された。

現状は田畠や住宅地となっており、城館の遺構はかなり破壊されているが、近世前半期に描かれたものとされる「山川綾戸城古図」「山川古城図」や、1946 年米軍撮影の航空写真及び現地の痕跡から城館の構造を復元推定した。曲輪Ⅰは「山川古城図」に本丸と記され、曲輪Ⅱとの間にある堀は東側半分ほどが現在も周囲より一段低い水田となっており、明瞭に痕跡が残っている。西側半分は不明確だがわずかに周囲より低い農地があり、米軍写真と合わせると堀跡を追うことができる。現在、曲輪内に遺構は存在しないが、米軍写真には南西部に土塁が一部写っている。

曲輪Ⅱは「山川古城図」に二ノ丸と記された小規模な曲輪で、現在遺構は存在しないが、米軍写真に埋没谷や堀跡と思われる痕跡が写っている。曲輪Ⅲ（「山川古城図」に三ノ丸と記載）も同様に、米軍写真から北側の堀跡を推定した。

以上が狹義の城館であるが、曲輪Ⅲの北にある字新宿には土塁の一部が現存しており、この土塁はさらに南側に延びていたことが米軍写真に見える。現存土塁の北側には堀も一部残っており、往時は東側の谷津まで延びて台地を切っていたと考えられる。また、字新宿の北側の字北洞貝・南洞貝・松原の北部にも堀と土塁の痕跡が米軍写真により確認でき、字新宿部分と同様に東側の谷津まで延びて台地を切っていたと考えられ、これらの町場を含んだ部分もそれぞれ曲輪となっていた。

さらに、前述の文書には「山川戸張宿城」という文が見え、同時期の別文書には「宿城悉仕払」や「已為山川近陣、サレハ糟連井・今宿トテ城外ニ構アリ、然ニ（北条）氏政今宿可攻破備ニテ」との記載もあり、山川綾戸城から谷津を挟んだ東側約 1 ~ 1.5km にある糟連井（粕礼）・今宿などと共に戸張・宿城として広義の城館を構成していたと推定できる。（越田）



山川綾戸城跡推定復元図 越田真太郎 2022.1.8

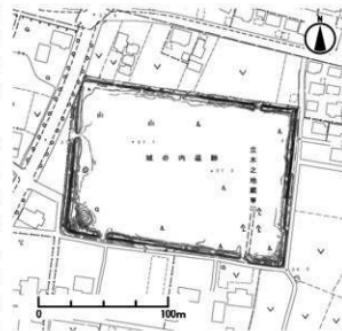
しろのうちやかたあと
0489 城の内館跡 結城市結城 現況：山林 別称：城の内遺跡

地図 38

城の内館跡は、結城市街地の南側、台地内奥部に所在する。中軸線で東西 177.5m、南北 127.5m の規模を持つ方形館で、中心部の標高は 37.1m である。四方を土塁が回り、堀も部分的に残しておおり往時は全周していたと考えられる。北西の一部が発掘調査されており、調査成果によると土塁基底部の幅は 7 m、堀幅は 5 m。土塁の南東角が 2 mほど外に張り出しており、北・西・南西・南東に土塁の切れ目があるが、土塁の張り出し部に近い南東部が虎口と思われ、現在は遺跡内にある立木之地蔵尊の参道となっている。南東・南西部の土塁内側に窪みがあるが、堀跡か庭園跡か不明である。

城の内館跡は、結城氏初代朝光によって鎌倉期に作られ、室町期まで結城惣領家の館であったと考えられているが、発掘調査成果からは 14 世紀後半から 15 世紀前半の遺物が出土し、15 世紀後半には廃城となったことが判明した。また、結城氏一族の山川氏の居館と考えられる山川館跡（0488）より規模が小さいことなどを合わせると、築城主体については再検討が必要と思われる。（越田）

城の内館跡測量図 結城市教育委員会『『城の内遺跡 II』より加筆して転載』



ゆうきちょうるい
K039 結城長堀 結城市結城 現況：寺社境内地、畠地ほか 別称：左前

地図 38

結城長堀は結市の北端部、栃木県小山市境にある東西を河川に挟まれた台地上に所在し、現在は西端の日鷺神社境内付近に約 200m、台地中央の墓地北側（標高 44.8m）に約 100m 残存しているのみだが、明治期の迅速測図には土塁が台地を横断するように描かれている。残存する遺構は、西仁連川に面した小さな舌状台地の先端にある日鷺神社を避けるように、社殿の東側に南北方向の土塁と堀が確認できる。なお、本神社は文和元年（1352）の健田須賀神社文書に見える古社である。社殿北側で堀と土塁は台地の縁辺に沿って東に曲がる。残存状況の悪いところもあるが、結城市側から見て堀・土塁・堀・土塁と二重になっている。その先は、道路や地割に痕跡が見られ台地中央の堀と土塁に繋がり、東へ直進して田川へ注ぐ谷津田まで続いていると思われる。

結城長堀がある台地上には、宇都宮と結城を結ぶ日光東往還とも呼ばれる多功道（県道 146 号線）が通過し、1947 年撮影の航空写真では街道が土塁に当たり屈曲していたことが分かる。結城長堀は左前とも呼ばれていたようで、南南西約 4 km の結城市繁昌塚付近にかつてあったという右前と呼ばれる土塁と共に、街道を閉塞し防御するために築かれたものであろう。（越田）



結城長堀推定復元図 越田真太郎 2022.2.5

おおたじょうあと
0491 太田城跡 八千代町太田 現況：宅地、畠地、山林、境内地

地図 47

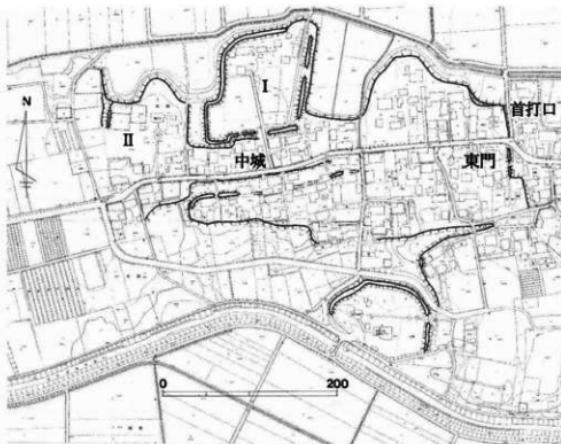
太田城跡は、鬼怒川によって開析された東に開口する樹枝状の谷津を形成する半島状の台地上に位置する。台地の標高は約 26m で、隣接する低地の水田面とは約 4m の比高差を測る。

東・南・北の三方を低湿地に囲まれ、天然の要害として舌状台地の地形を巧みに利用して築城されている。

城跡は、現在の太田集落の西半分域に及び東西約 500m、南北約 300m の範囲を土塁と堀で囲まれる。東は、ほぼ南北に走行する土塁と堀で区切られ東門の字名が残る。また、付近には首打口（しゅうちぐち）の字名も残るなど刑場の存在をも連想させる。西は、龍昌院の西側に走行する土塁と堀とで区切られる。さらには、現集落のほぼ中央を東西に走る町道に沿うかのように土塁と堀を断片的に見ることが出来る。集落の中ほどには中城の名を残すことから太田城の中枢にあたるもので、重臣たちの屋敷地も配されていたことを思わせるだけでなく、町道も集落の西辺と東辺においては変則的に鍵の手に曲がるなど木戸の存在を窺わせてくれる。

曲輪Ⅰは、城郭のほぼ中位に位置し堀と土塁が閉続する。さらに龍昌院を挟み残存する堀と土塁が曲輪Ⅱの名残であろうか、集落内の城郭遺構の多くは開発を受けたため詳細を得ない。また、南辺の愛宕神社の周囲にも土塁が残されている。

戦国時代（末期切）多賀谷重經は、下総における領域拡大を図るために家臣の赤松氏を太田に配し築城が開始されたことに始まる。天正 17 年（1589）多賀谷重經の子、虎千代（元服して三経を名乗る）は和歌（島）城（0492）に入るも、翌天正 18 年（1590）多くの重臣たちとともに太田城に移り、ここに多賀谷氏は太田多賀谷氏と下妻多賀谷氏の三分となる。（大谷）



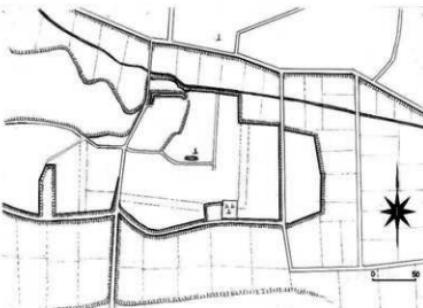
太田城跡概念図 大谷昌良 2019.12.8

わかじょうあと
0492 和歌城跡 八千代町若 現況：山林、宅地、畠地 別称：和歌島城跡 地図 47

和歌城跡は、鬼怒川によって開析された東に開口する樹枝状の谷津を形成する舌状に突出した標高 26m を測る台地の先端部に位置し、谷津水田を挟んで太田城（0491）とは約 200m の至近距離にある。低地水田面とは、約 4m の比高差を測る。

東・南・北の三方を低湿地に面し、東西約 130m、南北約 140m の範囲を二重の土塁と濠で囲まれていることが昭和 58 年の測量調査、確認調査により判明した。

古記録からは、永正年間（1504-21）には島館、天正年間（1573-92）には島城とも呼ばれ、永正末年に和歌十郎が多賀谷配下の赤松民部に討たれ、以後、赤松氏の支配地となる。城内には五輪塔（赤松祐弁の墓）と伝えられる石造物も残る室町時代の城館跡である。（大谷）



和歌城跡縄張図 余湖浩一 2002.11

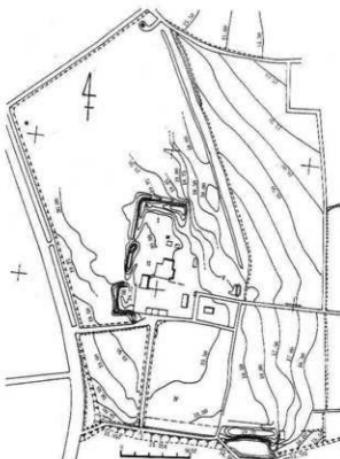
おさきじょうあと
0494 尾崎城跡 八千代町尾崎 現況：宅地、山林、畠地ほか 別称：秋葉館 地図 55

尾崎城跡は、飯沼川の支流（現在の入沼排水路）で南に開口する樹枝状の谷津の西側台地の縁辺部に位置する。標高約 19m を測る台地上で、東側の低地水田面とは約 11m の比高差を測る。

昭和 58 年 12 月に測量調査が実施され、屋敷地の北と西には土塁と堀が残り、南北に連なる連郭式の遺構配置が考えられている。また、後世によるとと思われる馬出状の「コ」の字を呈する土塁遺構も確認されている。

秋葉家からの聞き取りを踏まえると、初現時期は不明ではあるが土豪として当地に土着したのち多賀谷氏の家臣团となり、出城的な機能に変改され、地元で「たてだし」と呼ばれる旧道に並行するように築かれた土塁が外郭線として利用されたものと思われる。

（大谷）



尾崎城跡実測図 八千代町、八千代町史編さん委員会
（『八千代町史 通史編』より転載）

しもつまじょうあと
0500 下妻城跡 下妻市本城町 現況：宅地、公園ほか 別称：多賀谷城

地図 47

下妻城跡は、砂沼の東側の標高 24m ほどの微高地に築かれていた。現在、周辺は宅地化が進んでいるが、かつては砂沼や大宝沼に囲まれた島状の地形であった。

現在の多賀谷城址公園のある場所がかつての本丸であったと思われ 50m 四方ほどの規模がある。本丸の東側に二ノ丸を置き、それらを囲むようにして南館、北城、三ノ丸などが配置されている。また、砂沼の西の対岸には隠居曲輪が設置されていた。北城の北側の陸続きになっている場所が本宿と呼ばれており、ここに城下集落が形成されていた。

城跡は市街地の中心部にあったため、昭和 36 年の都市計画事業によって遺構のほとんどが消滅してしまっている。現状では、多賀谷城址公園となっている本丸の他、平沼郭や今宿に城壁の名残が見られる程度である。

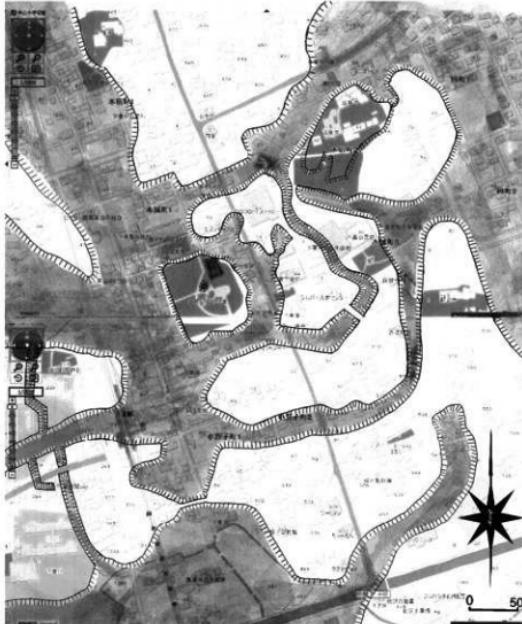
享徳 3 年（1454）古河公方足利成氏の命によって関東管領上杉憲忠を討った多賀谷家政は、その功績によって常陸関在 33 郷を与えられ、居城として下妻城を築いた。

その後、戦国期になると多賀谷氏は下妻城を拠点としてその勢力を次第に拡大していった。

元亀 2 年（1571）、多賀谷政経は、佐竹氏と結んで谷田部城（0708）を攻め落とした。北条氏による常陸侵攻が進められていたが、政経は下妻城に拠ってこれを撃退した。

天正 4 年（1558）、政経の跡を継いだ重経は、上杉謙信や佐竹義重と結んで、北条方の小田氏・岡見氏を攻撃した。

小田原の役後、多賀谷氏は結城氏の家臣となることを拒み、佐竹氏に所属していた。文禄元年（1592）、文禄の役の参加に消極的な態度を示したため、豊臣秀吉の不興を買って領地の大半と下妻城を没収された。その後、下妻城は破却された。（余湖）



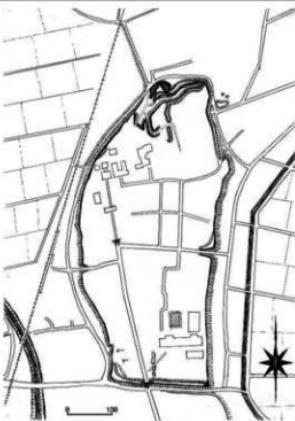
下妻城跡図 余湖浩一 2021.10

0501 大宝城跡 下妻市大宝 現況：宅地、神社、学校ほか 別称：下妻城 地図 47

大宝城跡は、糸綾川左岸の標高 21m、比高 5m ほどの平野部に位置している。かつては大宝沼に臨む微高地であったと考えられる。東西 200m、南北 500m ほどと広大な城域を有しているが、現在は、大宝八幡宮、下妻市立大宝小学校や住宅地となっており、遺構の多くは破壊されている。ただ、城域の南端部には巨大な土塁が、北端部には搦手虎口の跡と思われる遺構が残されており、旧状を偲ぶことができる。

大宝城は、貞永元年（1232）、小山氏の一族下妻修理権亮長政によって築かれた。その後、南北朝時代初期まで下妻氏の居城として用いられていた。

南北朝時代の城主下妻政泰は、南朝方の北畠親房に加担した。そのため、暦応 4 年（1341）、北朝方の高師冬によって関城（0520）と共に攻撃された。関城と分断された大宝城は康永 2 年（1343）11 月 11 日に落城し、城主政泰も自害した。（余湖）



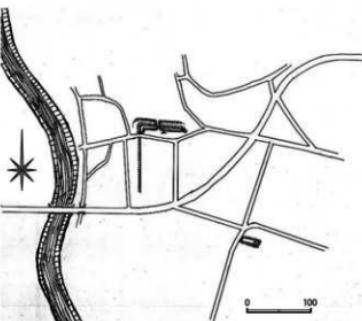
大宝城跡縄張図 余湖浩一 2004.10

0502 駒城跡 下妻市黒駒 現況：宅地、山林、畑地 別称：駒館、駒楯城 地図 47

駒城跡は、鬼怒川左岸の標高 28m の平野部に築かれていた。周辺では大規模耕地整理が行われており、遺構の大部分はすでに失われてしまっている。

遺構として残されているのは土塁が 1 本だけであるが、かつては東西 120m、南北 153m の方形に近い形状であったという。1961 年の航空写真を見ると西側の土塁のラインも見えている。

駒城は、南北朝時代の騒乱期に中御門少将藤原実寛によって築かれた。実寛は北畠親房に呼応して挙兵したため、北朝方の高師冬によって攻撃された。しかし、暦応 3 年（1340）5 月 27 日、高軍の夜襲を受けて落城した。その後も南朝方に奪い返されるなど騒乱は続いた。（余湖）



駒城跡縄張図 余湖浩一 2021.7

くげたじょうあと
0516 久下田城跡 筑西市樋口 現況：山林、畠地、宅地 別称：城山 地図 32

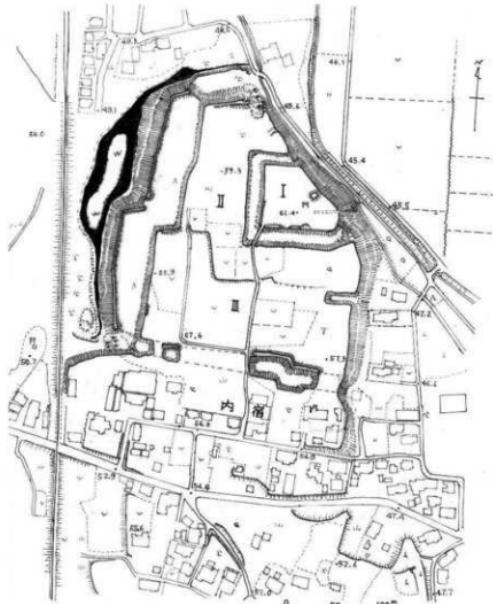
久下田城跡は、城跡の東辺を南流する五行川の右岸、標高約 58m の河岸段丘上に位置する。低地との比高差は約 10m を測る。

曲輪 I は、東辺を急峻な切岸とし、南、西、北の三方を幅約 15m、深さ約 5m の堀と低位な土塁に囲まれた台形状を呈する。曲輪 II は、曲輪 I を囲み、その南方に曲輪 III が広がる。曲輪 III はその南辺を高さ 2m、下幅約 5m の土塁と土塁に続く上幅約 20m、下幅約 15m、深さ約 10m を測る箱堀が、東西約 200m にも及んで台地を寸断する。曲輪 II・III の西辺は外側に土塁を巡らせた腰曲輪と想われ、櫓台も残る。また、曲輪 I の北側には五行川の流れを引き入れて城の北から西側一帯を水堀とした戦略的な構造が残されている。城はさらに曲輪 III の南域にも張り出すものと思われるが、土塁や堀の一部が残されるほかは宅地化等による土地の変容を受け不明瞭である。

当地は、天慶年間（938-47）藤原秀郷が平将門を追討するために築いた上館・中館・下館の上館にあたると伝えられている。その後、時代を経て天文 14 年（1545）結城政勝は南下する宇都宮氏に対する防備と対抗を水谷正村（蟠龍齋）に託し、同年 10 月に久下田城の修築に至った。正村は、これまで居城としていた下飯城（5017）を弟の勝俊に譲り、久下田城を拠点に東の佐竹氏、南の小田氏、北の宇都宮氏に対峙し、幾多の戦乱を経て結城氏を支えた。

また、正村は久下田城の西の高台の地に芳全寺を築いている。この芳全寺境内にも土塁状の高まりが残るなどその地の利を活かし、久下田城の出城の役割を有して北と西の護りに供したものと思われる。

城は、慶長 3 年（1598）正村の死去とともに戦略的な戦いはなくなり、元和元年（1615）の一国一城令で廃城を迎える。寛永 16 年（1639）水谷氏の備中国成羽移封とともに当地での支配の終焉を迎えた。（大谷）



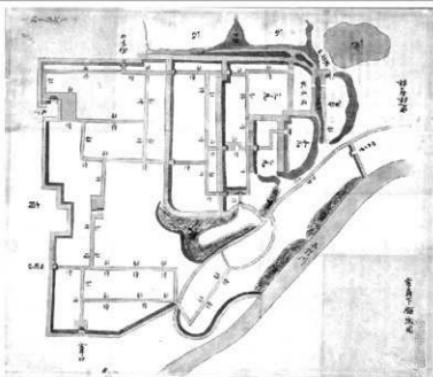
久下田城跡縄張図 遠山成一（稲葉修氏図を参考に作成）
「筑西市都市計画基本図」を基にした 2022.1.26 - 12.27

しもだてじょうあと
0517 下館城跡 筑西市甲 現況：宅地、公共施設地 別称：螺城、法螺貝城 図39

下館城跡は、城跡の東側を南流する五行川右岸の標高約43mの河岸段丘上に位置する。

文明10年（1478）結城氏の家臣であった水谷勝氏は、結城氏広から下館の領地を与えられて築城に至った。常陸国内にあたっては東の佐竹氏、南の小田氏に備え、以後、寛永16年（1639）8代勝隆までの161年間にわたって水谷氏により統治された。

城跡の遺構は、早くからの市街地化により湮滅の状況であるが、古絵図により「城山八幡神社」付近の本丸、「下館小学校」付近に二ノ丸、三ノ丸と多くの侍屋敷を見る事ができる。（大谷）



常陸下館城跡
日本古城絵図 東海道之部(6)（「国立国会図書館デジタルコレクション」より転載）

いきじょうあと
0518 伊佐城跡 筑西市中籠 現況：宅地、寺院ほか 地図39

伊佐城跡は、城跡の東側を南流する五行川右岸の標高約46mの河岸段丘上に位置する。

鎌倉時代、伊佐朝宗は源頼朝の奥州征討に功をあげ、福島県伊達郡を賜り伊達氏を名乗り、仙台伊達氏の祖となる。伊佐の地には、朝宗の長男と三男がとどまり南北朝時代まで続いたという。伊佐城の存在を示す資料は、南北朝時代の南朝方の拠点となり活躍した伊佐太郎、伊達行朝が知られる。しかし、康永2年（興国4年、1343）の関宿（0520）の陥落とともに伊佐城も落城し、以後歴史の舞台から遠ざかる。延宝5年（1677）仙台伊達氏の故地を調査すべく伊達綱村が家臣を遣わして中籠周辺を巡視させた『所々廻見覚書』がある。

城跡としては不明な点が多いものの、西辺の小字「館の内」の地には空堀と高さ5m、遺存長20mにも及ぶ土塁の一部が残されるなど往時を偲ぶことができる。（大谷）



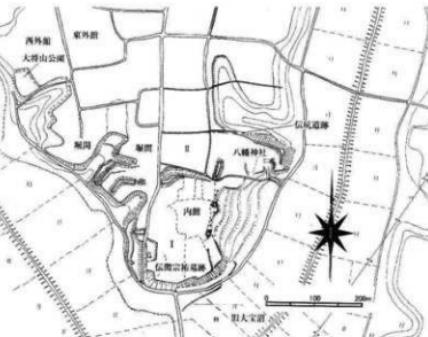
伊佐城跡概要図 『日本城郭大系 第4巻』より
（転載）

せきじょうあと
0520 関城跡 筑西市関館 現況：宅地、山林、畠地、寺院

地図 47

関城跡は、東西ならびに南の三方を旧大宝沼に囲まれ、沼に臨む舌状台地の先端で標高約28mの高台に位置する。低地との比高差は約10mを測る。鎌倉時代初期に関朝泰による築城とされるが実態は不明である。南北朝時代は南朝方の拠点となり、暦応4年（興国2年、1341）小田城（0717）を追われた北畠親房らを迎入れ、高師冬率いる北朝方との攻防戦を繰り広げるも康永2年（興国4年、1343）陥落し、関宗祐・宗政父子も自害、親房は吉野に脱出した。

城跡は宅地化が進み、断片的に曲輪や土塁の一部が残され、北朝方に掘られた坑道跡も発見されている。（大谷）



関城跡概図 本間朋樹『『図茨』より転載』

とうえいぎんじょうわいあと
0524 東睿山承和寺跡 筑西市中上野 現況：畠地 別称：堀ノ内遺跡、百間濠 地図 48

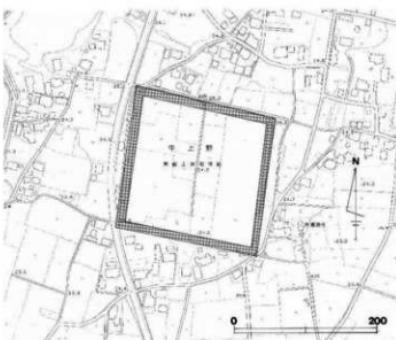
東睿山承和寺跡は、小貝川左岸の標高約25mの島状に残された微高地に位置する。

昭和62年（1987）の確認調査により、鎌倉期の居館跡であることが判明した。

小字「堀ノ内」の一带に約二町四方の方形の堀が巡り、調査により堀の上幅は約10m、下幅は約5m、深さは約3m、堀の東辺の外郭に土塁状の残骸の高まりが認められる。

地元の伝承では「承和寺跡」とされている。「承和寺」は平安時代の円仁（慈覚大師）の手になるとされ、筑西市黒子に所在する天台宗の巨刹「千妙寺」の前身寺院とされる。

確認調査により寺院跡の存在は否定されるのも、豪族居館としての存在は確かなものとなる。しかし、豪族の特定には至っていない。（大谷）



東睿山承和寺跡概要図 大谷昌良 2021.10.10

えびがしまじょうあと
0525 海老ヶ島城跡 筑西市松原 現況：宅地、畠地、山林

地図 40

海老ヶ島城跡は、大川の流路を利用した湿地帯に囲まれ東西約300m、南北約400mで総面積は約12haにも及び、水田面との比高差は約1~2mほどを測る標高26mの微高地である。

寛正2年（1461）から応仁元年（1467）にかけて築城され、結城成朝の嫡男秀千代（後の海老原輝明）が居城したとされる。天文15年（1546）小田勢の攻撃を受け落城し海老原氏は滅亡、以後、上杉氏、北条氏、佐竹氏ら有力氏族の争奪の場となり、関ヶ原合戦後、佐竹氏の秋田転封により廃城となる。

集落の北側の水路は外堀の名残りで、土塁も部分的に残る。また、集落内の民家敷地にも堀や土塁の残存を確認することができる。

（大谷）



海老ヶ島城跡縄張図 西山洋 2004.12.13 (『図説』より転載)

しほじょうあと
0529 四保城跡 筑西市吉田 現況：宅地、畠地ほか

地図 40

四保城跡は、小貝川左岸の標高約36m台地縁辺部に位置する。

小字「館」を称する曲輪Iの北から西にかけての大土塁、さらに北の曲輪IIは低い土塁で囲まれ、曲輪IIIが北に延びる。西側の水田面との比高差は10mを越える天然の要害城となっている。

築城時期は不明であるが、南北朝時代は南朝方として村田四保入道なる人物の存在もあり、関城（0520）、大宝城（0501）を支えたという。しかし、暦応4年（興国2年、1341）北朝方に攻められ落城したともいわれ、その後の情勢は一切不明である。（大谷）



四保城跡縄張図 西山洋 2006.1.21 (『図説』より転載)

おぐりじょうあと
0526 小栗城跡 筑西市小栗 現況：山林 別称：巴の城、城山

地図 33

小栗城跡は、小貝川左岸で鶴足山塊の最西端、標高約88mの丘陵突端上に位置する。北は小貝川、西と南は城を巡るよう旧河道が低湿地を形成し、東は丘陵を南北に深く断ち切って堀とし天然の要塞としている。

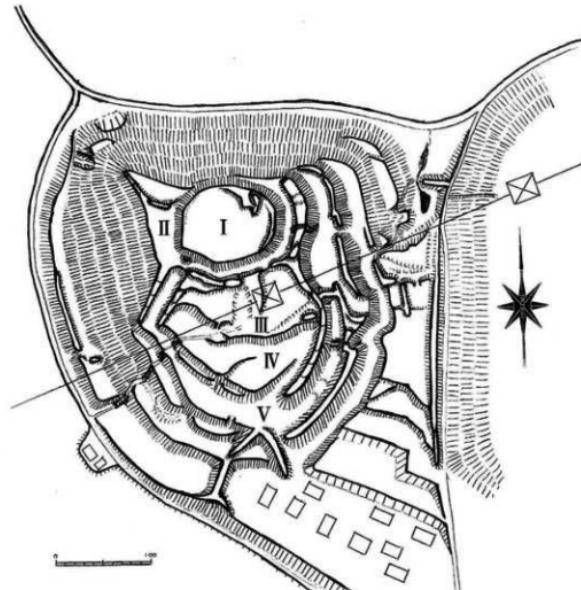
曲輪Iは、丘陵のほぼ中央の山頂に位置し、北は小貝川の川面との比高差約40mを測る急峻な崖となる。さらに、この曲輪Iを中心として南麓にむけて帯郭、空堀が段々と造られ、虎口、土橋が設けられる。なかでも東側での横堀、土塁の多用は特徴的で城を取り巻くように幾重にも巡る。

城の築城時期は不明であるが、鎌倉期には頼朝の御家人として、室町期には幕府方の扶持衆としての小栗氏が活躍した場である。記録としての登場は、建武3年（1336）北畠顯家勢との戦いに始まり、応永年間の上杉禪秀の乱において小栗満重は頑なまでに幕府方の扶持衆として応永25年（1418）、応永30年（1423）と度重なる鎌倉公方足利持氏勢に攻め込まれている。この上杉禪秀の乱によって、小栗満重の去就が後の小栗伝説や説経節『おぐり』として姿を変えて全国を巡ることとなった。

永享12年（1440）結城合戦での小栗助重の動向も、ついに小栗城での復活には至らず、小栗氏は歴史の舞台

から消えることとなる。この後、小栗城はその位置的な重要性から境目の城として争奪の場となる。結城氏、足利氏、小田氏、そして結城氏へと小栗地域の支配は入れ替わり、城の防御形態、城構えも変化してきたものと思われる。廢城時期についても明確ではない。

（大谷）



小栗城跡縄張図 余湖浩一 『『図考』より転載』

まかべじょうあと
0531 真壁城跡 桜川市真壁町古城 現況：公共施設地、宅地、水田、畠地

地図 40

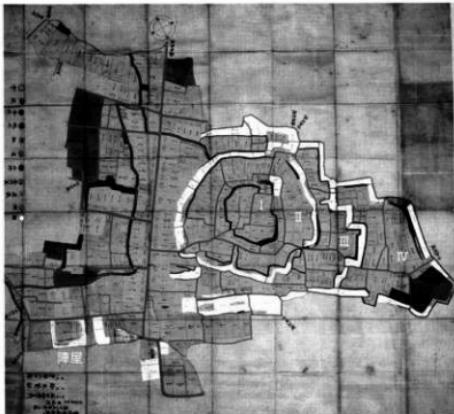
真壁城跡は真壁氏の居城で、筑波山塊から北西に延びた尾根が平地へと至る微高地上に築かれた平城である。北を田中川、南を山口川に挟まれた東西約 850m、南北約 400m の東西に長い城域で、現在の大字古城の範囲とほぼ一致する。東から西へ緩やかに傾斜する旧地表面を整地して築かれおり、城の西側には戦国時代の城下町が形成されていた。

現在、遺構が良好に残存している県道 41 号線より東側の部分は、平成 6 年（1984）に国史跡に指定され、史跡整備に伴う発掘調査が進められている。県道より西側は、江戸期以降町場が拡大し、宅地化が進んでいるが、地割や古絵図から復元が試みられている。

発掘調査成果などから判明する最終期（16 世紀後半代）の真壁城跡は中心に曲輪 I（本丸、標高 47m）があり、曲輪 I の外側に曲輪 II（二の丸）が回る。曲輪 II の東側には曲輪 III（中城）、曲輪 IV（外曲輪）が付属し、西側にも曲輪が存在していたと推定されている。こうした姿は、現在も一部に残る大型の堀跡や土塁、曲輪 IV（外曲輪）を中心進められている史跡整備などにより想像することができる。また、曲輪 III（中城）からは発掘調査により池や茶室などの庭園遺構が確認されており、中世東国武士の実態を示す良好な資料となっている。

真壁城跡の築城時期は明確ではなく、平安時代末期に真壁郡司職を帯びて入部したと考えられている常陸平氏一族の平長幹（真壁氏祖）が築いたとする説もあるが、現在は真壁文書などの分析から 14・15 世紀ごろの真壁氏の本拠は真壁城跡から北西へ約 2 km 離れた危熊城跡（0534）付近にあり、15 世紀中ごろに本拠の移転があったとする説が有力視されている。これは、発掘調査で確認された 15 世紀中ごろからこの地に館が造られはじめ、次第に拡大していったとする調査成果と矛盾しない。

その後、真壁城跡は戦国期真壁氏の居城として城下町と共に発展していくが、慶長 7 年（1602）佐竹氏の移封に従い真壁氏も秋田へ移り廃城、城域は古城村となった。真壁地域は徳川氏直轄領を経て、慶長 11 年（1606）浅野長政に隠居料として与えられ、真壁藩が成立了。長政は真壁城跡の南西端に陣屋を設けて住んでいたとする伝承もあるが詳らかではない。跡を継いだ長重は、新たに城下町中心部の高上町に陣屋を整備し、そこで政務を執り行っている。なお、真壁城跡の発掘調査では近世初頭に堀を埋めた痕跡などが確認されている。（越田）

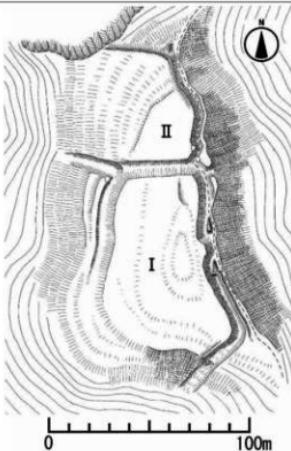


『明治 7 年（1874）古城村地籍図』（桜川市所蔵）に加筆

たいらのよしかねやかたあと
0532 平良兼館跡 桜川市真壁町羽鳥 現状：山林 別称：リュウガイ城 地図 40

平良兼館跡は、筑波山の北から北西方向へ延びる尾根の先端部に所在し、曲輪Ⅰ中心部の標高は130mである。2つの曲輪で構成され、南側の高い位置に曲輪Ⅰ、北に曲輪Ⅱがある。東・南・北の三方と曲輪Ⅰ・Ⅱ間に堀があり、北側の一部に土塁が見られる。曲輪の東側を尾根道が通っており、尾根道を上った先には堀状の道（深さ3～4m、最大幅10m）が標高450m付近の地点まで断続的に確認できる。城館と関連するものかもしれない。

遺跡名は、平安時代の武将平将門の叔父である平良兼の宮所「服織（はとり）之宿」が、城館の所在する尾根の南にある羽鳥（はとり）集落にあったと考えられるところからきているが、現存する遺構が平安期のものであるとは考えにくく、中世以降の城館で、機能としては眼下を通る常陸国府へ向かう街道を監視する目的や、尾根全体を防御線とする際の構成施設などが想定される。（越田）



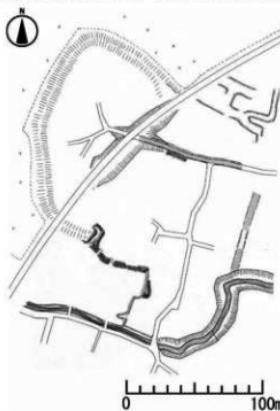
平良兼館跡地図 藤井尚夫『真壁町の城館』より加筆して転載)

しいわじょうあと
0533 椎尾城跡 桜川市真壁町北椎尾 現状：水田、宅地ほか 別称：椎尾堀の内 地図 40

椎尾城跡は、筑波山の北から北西方向へ延びる尾根先の微高地に所在し、曲輪の中心部の標高は32.5mである。

堀の内集落の中に入り遺構はほとんど残っていないが、南西部の土塁が民家の裏手に一部残存している。残存土塁は南西部から東へ延びて南へ屈曲して紫尾川に至る。紫尾川は城館の南東部の堀を兼ねていたと思われる。城館の東側の堀は残存していないが、民家の建設中に堀の一部が見つかっている。北側の堀は戦前までは残っていたというが、現在は道路となっている。

伝説では平貞盛の後裔、平国春により承元2年（1208）築城とされる。椎尾氏の居城とも言われ、真宗高田派開祖真仏生誕地との伝承もある。真仏は椎尾春時と称したという。また、城館の南東部から南に80mほど離れた民家から朝鮮通宝（初鑄年1425年）を最新銭とする銭貨が出土している（現存は418枚）。城館と関連するものかもしれない（越田）



椎尾城跡地図 藤井尚夫『真壁町の城館』より加筆して転載)

かめくまじょうあと
0534 亀熊城跡 桜川市真壁町亀熊 現況：宅地、水田、畠地、寺社境内地ほか 地図 40

亀熊城跡は、桜川と桜川に注ぐ谷津に挟まれた南北に長い舌状台地上に造られている。宅地化が進んでおり、全容をとらえるのは困難だが、堀や土塁などの遺構が残存しているところもあり、研究者により復元が試みられている。

主郭と考えられるのは、南東部の台地縁辺にある通称オテラヤマと呼ばれている区画で、現在は墓地になっており、北・西側に堀跡が残る。周辺には中世の五輪塔も見られる。オテラヤマの南方には東西方向の土塁があり、道路が屈曲していることから虎口があった可能性が高い。他にも西の谷津沿いやオテラヤマ北方などに堀跡が残され、大規模な城館であったと考えられるが、さらに北側にも城館が広がる可能性も指摘されている。

築城時期は不詳だが、真壁文書や表採資料の分析から14・15世紀の真壁氏の本拠で、15世紀中ごろに真壁城跡（0531）へ本拠の移転があったとする説が有力である。また、城内を通る南北道が古代に遡る道で、これを取り込んで築城されたとも考えられている。（越田）



亀熊城跡縄張図 藤井尚夫『真壁町の城館』より加筆して転載

やがいじょうあと
0535 谷貝城跡 桜川市真壁町上谷貝 現況：宅地、山林、水田、畠地 地図 40

谷貝城跡は、観音川東岸の河岸段丘上にあり、城館の東に入る谷津により舌状になった台地に築かれている。南北に2つの曲輪があり、曲輪Iの標高は43.7mである。

北側にある曲輪Iは屈曲部を持つ堀と土塁が良く残されている。虎口は北・東・南に設けられ（西は後世の改変と推測）、内部は民家となっている。南側の曲輪IIは現在堀の一部が残るのみだが、かつては土塁もあったという。東側の谷を延長する形で曲輪Iの北側をまわる堀があったようだが、現在は不明である。

真壁氏配下の藤田氏の居城とされ、現在も藤田家が居住している。また、曲輪Iが平場にあり屈曲部を多用して虎口に横矢を掛ける工夫がなされたものであるのに対し、曲輪IIが舌状台地の先端部という地形を生かした構造であることなどから、曲輪IIが古く、その後曲輪Iを構築するとともに曲輪IIも陣城として再整備を行ったとし、その時期を開ヶ原合戦時点に求める説もある。（越田）



谷貝城跡縄張図 藤井尚夫『真壁町の城館』より加筆して転載

やがいみねじょうあと
0536 谷貝峯城跡 桜川市真壁町下谷貝 現況：宅地、山林、水田、畠地

地図 40

谷貝峯城跡は、観音川東岸の河岸段丘上に所在する。曲輪Ⅰを曲輪Ⅱが囲む輪郭式の城館で、曲輪Ⅰ中心部の標高は42.0mである。

曲輪Ⅰは堀と土塁が方形に巡り、東側に虎口が作られている。虎口前面には土橋は見られない。

曲輪Ⅱは南北に走る道路と宅地造成により東側から南側にかけての部分が不明瞭になっているが、北側や西側には土塁と堀が良好に残存している。ただし、北西部には土塁・堀が見られない。

城主等に関しては不詳だが、曲輪Ⅱの北西部の堀と土塁がない部分を後世の破壊ではなく、造られていなかった未完成の城館であったとみて、本城館は関ヶ原合戦前に急速造られ、戦況の変化により未完成のまま放棄されたもの、とする説もある。(越田)



谷貝峯城跡縄張図 藤井尚夫(『真壁町の城館』より加筆して転載)

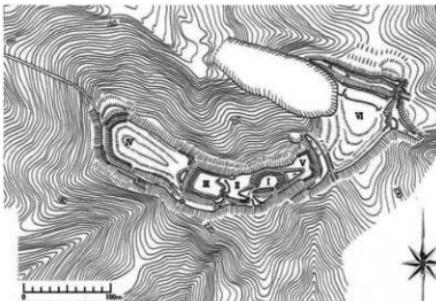
はぐろさんじょうあと
0539 羽黒山城跡 桜川市西小塙 現況：寺社境内地、山林

地図 34

羽黒山城跡は、桜川市と笠間市境にある羽黒山の頂上に所在し、東から西へ延びる尾根上に築かれている。城下には西小塙の宿があり、過去には方形館跡もあったという。

城館は東側の尾根基部を堀切で断ち切り、東西に曲輪を並べた構造である。曲輪Ⅰは城館の中央部にあり、標高は245m、内部に名称の由来となっている羽黒神社(二所神社)が祀られ、土塁の内側には小規模な石積みが見られる。曲輪Ⅰの西には曲輪Ⅱ～IVが並び、各曲輪の南側を東西に尾根道が走っている。道は、曲輪IVの先で急な坂道となって麓の城下へ続いている。曲輪Ⅰの東には曲輪V・VIがあるが、曲輪VIはあまり造作された形跡がなく、尾根道も不明瞭である。曲輪VIの北東端は大規模な堀切によって尾根を断ち切っており、土橋を渡って北へ数百m進むと棟峰城跡(0543)へ到達する。

曲輪IV辺りからは眼下の岩瀬盆地がよく見渡せ、尾根道や街道を監視する機能が想定できる。軍記物には笠間城主の甥が羽黒に居住していたと記すものもあるが、詳細は不明である。(越田)



羽黒山城跡縄張図 因田武志 2006.2.10(『図茨』より加筆して転載)

とみやじょうあと
0540 富谷城跡 桜川市富谷 現況：山林、畠地、工場敷地

地図 33

富谷城跡は、標高 365m の富谷山より南方に派生した尾根先端の平端部、標高 82m に位置する。城の北側は一段高くなっているが、現在は採石場となり旧情をとどめない。

城域の北端は採石場との間の道路となるが、おそらく堀跡と考えられる。こちらに面して第Ⅱ郭には一部土塁痕が残る。往時は土塁が全面に築かれていたと思われる。

第Ⅰ郭は、北側に空堀を挟んで第Ⅱ郭と接し、西から南にかけ第Ⅱ郭が空堀を挟んで L 字形に接している。第Ⅰ郭北側には土塁が築かれている。

第Ⅱ郭は、第Ⅰ郭の北から西にかけて L 字形に広がる。この北側には土塁の残欠がみられ、現在道となっているのが、堀跡であろう。

天正年間に、北に接する益子氏の城として築かれ、加藤氏が城将として入っていたとされる。益子氏が対笠間氏のために築いたという伝承は、この城の背後北側が弱点という点からも首肯できよう。(遠山)



富谷城跡縄張図 遠山成一（青木義一氏図を参考）

はしもとじょうあと
0541 橋本城跡 桜川市上城 現況：山林、寺社境内地

地図 33

橋本城跡は JR 岩瀬駅の南東約 1.8km、筑波山から北へ延びる筑波山塊の北端に近い尾根上に位置し、北麓の集落との比高差は 140~150m ほどである。

城館は曲輪 I (標高約 227m) を中心に複数の曲輪で形成されている。曲輪 I の中央には土壇があり、南側に土塁・虎口が残る。曲輪 II は四方に土塁が残り、南側の下段に堀切がある。堀切から南西に尾根筋を 200m ほど進んだ先には、土壇状の地形が 2 基確認でき(車塚古墳群: 円墳 2 基として遺跡登録されているが古墳ではない)、尾根筋の道を遮蔽・監視するためのものであろう。曲輪 I から延びる東尾根には曲輪 III、北尾根には曲輪 IV があり、各々階段状の腰曲輪を持ち、防御性を高める工夫をしている。曲輪 III・IV の間の谷津には水が湧いており、水の手として利用されていたと思われる。

橋本城は、軍記物に笠間方と益子方の間で境目の城として登場する。また一説には南北朝時代に南朝方の春日頼国が立て籠った中郡の城であるとも、結城合戦前に鎌倉公方足利利氏の遺児春王・安王が挙兵した木所城であるとも言われるが確証はない。(越田)



橋本城跡縄張図 本間朋樹 2004.2.8

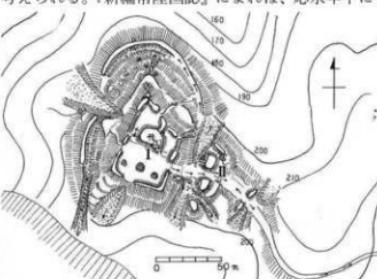
(『図志』より転載)

まかどじょうあと
0542 坂戸城跡 桜川市西飯岡 現況：山林、寺社境内地 別称：城山城 地図 33

坂戸城跡は、北関東自動車道桜川筑西 IC の北西約 2km に位置する城山の山頂（標高 217.8m）付近に所在する。山の南側中腹はゴルフ場となっている。麓との比高差は約 160m である。

城館の中心となる曲輪 I は南北 50m、東西 40m ほどの方形で、周囲に土塁が巡る。中央やや北寄りに土壇があり社が建っている。曲輪 I の西側や北側の崖下には堀や腰曲輪、東側には堀と曲輪 II があるが、全体に規模は小さく造作は不明瞭である。

応永 30 年（1423）の宍戸弥五郎宛足利持氏感状写『一本文書』に「常州坂戸合戦」とあり、このころには城館が存在していた可能性が考えられる。『新編常陸国志』によれば、応永年中に宇都宮家の小宅高国が築城し、小田氏治によって一時奪われるが、永禄 7 年（1564）に小宅氏が奪回、慶長 2 年（1597）宇都宮氏改易に伴い廃城になつたとされている。また、城館の南麓にある金谷遺跡からは、一辺約 80m の方形館跡や長さ 280m を越える堀跡、さらには鍛冶・鋳造関連の遺構など 15~16 世紀の遺構・遺物が検出され、坂戸城跡との関連がうかがえる。（越田）



坂戸城跡縄張図 青木義一 2016.1 (『続次』より加筆して転載)

ぐしみねじょうあと
0543 棟峰城跡 桜川市西小塙 現況：山林 地図 34

棟峰城跡は、羽黒山城跡（0539）のある羽黒山の北北東方向の峰続き、羽黒山より 20m ほど高い標高 265m の山頂部に位置する。羽黒山城跡が戦国後期の発達した縄張を見せるのに対し、こちらは二重の堀切が設けられているものの、全体的には古態を示す。

第 I 郭は細長く「く」の字形に北東方向へ、直線にして 100m ほど伸びる。最大幅は 15m ほどで、恒常的な大きな建物は建てにくいくと思われる。詰めの城として使われ、建物があったとしても小屋掛け等簡単なものであつたろう。北側から西側には腰曲輪が回るが削平は甘く、緩斜面状になっており、肩もはっきりしていない。

第 II 郭とは二重の堀切で分けられるが、第 I 郭寄りの堀切は切岸も高く厳重である。第 II 郭寄りの堀切は小規模であるが、第 II 郭から凸状に土橋のような部分が出ている珍しい形状をとる。

隣接する羽黒山城跡と比較すると、より古態を示すといえ、堀切はしっかり造作されており、戦国時代に入る頃までは使用されていたとみられる。（遠山）



棟峰城跡縄張図 遠山成一 (余湖浩一氏図を参考)

かどげじょうあと
0544 門毛城跡 桜川市門毛 現況：山林、畑地、宅地 別称：室町屋敷

地図 34

門毛城跡は、桜川市の北端部、栃木県境に近い場所に位置し、雨巻山（標高 533m）から南西に延びた尾根の先端部、斜面地に築かれている。

城館は南北に延びる雨巻山への道を抱え込むように作られており、北側には尾根を東西に断ち切る堀切がある。少し南側にも堀と土塁があり、そこから西側と東側に堀が繋がっていて、折れを作ったり堅堀と組み合わせたりする部分も見られる。西側には檜台状に四角く張り出した部分があり、このあたりは城館の遺構が明瞭に残っている場所で、標高は約 125m である。一方、南側は明瞭な遺構は残されていない。城内も明瞭な整地が見られず、緩やかな傾斜地となっているのみである。

城主について、『岩瀬町史』では室町氏の居館であった可能性を挙げているが、明確ではない。門毛城跡は、その構造からみて雨巻山へ通じる街道を見張ることを主目的とするとともに、南の岩瀬盆地中央部から来る街道が、北の益子方面、東の茂木方面へと別れる場所にあることから見て、これらの街道にも目配りをする目的をもって築かれたものと思われる。（越田）

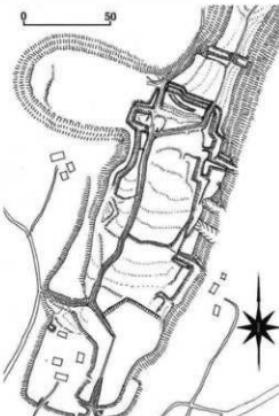
いけがめじょうあと
0545 池亀城跡 桜川市池亀 現況：山林、畑地

地図 34

池亀城跡は、桜川市の北東部、高峯から南に延びる尾根上に築かれている。一番北側に周囲から一段高くなつた南北 35m、東西 30m ほどの土壇状の部分（曲輪 I、標高 115m）があり、その南に土塁、さらに南に堀が造られている。曲輪 I が主郭のようにも見えるが、周囲は一段高くなっているだけで堀と呼べるほどではなく、曲輪 II あたりが本来の主郭で、曲輪 I は北側を守備するためのものであると考えられる。

曲輪 II～V は傾斜地に平場を造成し、明確な段で区切られているが、畑を開墾した際に壊されてしまったためか、遺構は不明瞭である。

軍記物には天正年間の笠間方と益子方との抗争の中に「池上」という拠点が登場しており、これが池亀城を示している可能性があるが、詳細は不明である。（越田）



門毛城跡縄張図 余湖浩一 2016.7
(『続茨』より転載)



池亀城跡縄張図 青木義一 2015.11 (『続茨』より加筆して転載)

やなかじょうあと
0547 谷中城跡 桜川市上城 現況：山林 別称：牙城、諏訪の峰

地図 33

谷中城跡は、岩瀬盆地中央部の独立丘陵の頂上に所在する。城館は短軸約50m、長軸約100mの楕円形の曲輪を堀と土塁が囲む単郭構造である。虎口は明瞭ではないが、北側に堀と土塁が屈曲している部分があり、ここが虎口であった可能性がある。曲輪内には東西2か所に土壇状の高まりがあり、物見台として利用されていたのかもしれない。東側土壇部の標高は108.8mである。丘陵の西側斜面には堅堀と思われる掘り込みが見られるが、現状はかなり埋没している。

頂上にある曲輪以外に、南東側の麓にある宅地の裏手にも土塁と堀が見られ、往時はこのあたりに居館があったと考えられる。また、曲輪の南には諏訪神社が所在する。

軍記物には天正年間の笠間方と益子方との抗争の中に「諏訪の峰」という拠点が登場しており、これが谷中城を示している可能性があるが、詳細は不明である。(越田)



谷中城跡縹図 青木義一 2015.1 『続茨』より加筆して転載

いそべじょうあと
0549 磐部城跡 桜川市磯部 現況：寺社境内地、宅地、山林

地図 34

磯部城跡は、桜川左岸の台地縁辺部に位置する磯部稻村神社周辺に所在している。宮司宅の所在する東側部分（曲輪I）と、社殿等の所在する西側部分（曲輪II）で構成され、曲輪I中心部の標高は62.2m、曲輪IIの中心部の標高は70.0mと曲輪Iの方が低い。

曲輪Iは北・西・南側に堀や土塁が巡るが、東側の低地に面する部分には見られない。曲輪IIは東側の曲輪Iとの間に堀と土塁が良好に残っており、南・西側にも一部残存する。曲輪IIから東・東南方向へ堅堀が掘られており、現在は通路になっている部分もある。

磯部稻村神社は鎌倉期には記録が見える古社で、室町期の謡曲「桜川」には磯部寺として登場する。一方、軍記物には天正年間の戦の中で磯部が拠点の一つとして記されており、磯部越前守という人物が登場したりする。実情は定かではないが、磯部城跡は神主職を有した土豪の館であったと考えられるだろう。(越田)



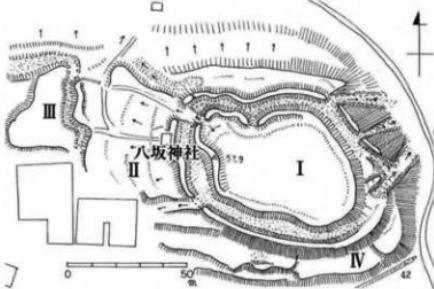
磯部城跡縹図 青木義一 2015.1 『続茨』より加筆して転載

とみおかじょうあと
0550 富岡城跡 桜川市富岡 現況：山林、寺社境内地ほか 別称：ユウギ山 地図 33

富岡城跡は、北関東自動車道桜川筑西 IC の北東約 600m、周囲を低湿地に囲まれた微高地上に位置する。周囲の低湿地との比高差は 14~15m である。

城館の中心となる曲輪 I（中心部標高 56.8m）は長軸 70m 短軸 50m ほどの楕円形で、幅 10m 前後の堀が周囲をほぼ全周する。土塁は北側や西側の一部に残存し、北西部に不明瞭であるが虎口と思われる痕跡がある。曲輪 I の南側は崖になっていて、約 7~8m 下には帯状の曲輪 IV が所在する。曲輪 I の西側には平場があり曲輪の可能性がある（曲輪 II・III）が、遺構は不明瞭である。

寛永 7 年（1630）に記されたという『谷中家由緒書』では、富岡城主を稻川土佐とするが詳細は不明。また、軍記物には天正 13 年（1585）に結城家の片見伊賀守の郎党が富岡で笠間方と合戦をしたと出てくるが、こちらも詳細は不明である。（越田）



富岡城跡縄張図 青木義一 2015.11 (『続茨』より加筆して転載)

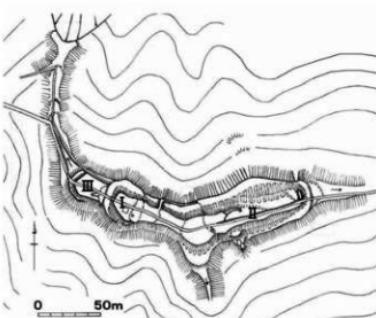
あまびきさんじょうあと
0551 雨引山城跡 桜川市本木 現況：山林 別称：竜蓋山の砦 地図 33

雨引山城跡は、筑波山から北へ延びる筑波山塊の一つである雨引山の山頂（標高 409m）付近に位置する。南側約 600m、標高約 200m の地点には古代の山岳寺院の系譜をひく古利雨引山樂法寺（雨引觀音）が所在する。

城館は尾根に沿って東西に細長く、山頂付近の曲輪 I を中心に東側に曲輪 II、西側に曲輪 III が配置される。曲輪 II の北側には帯曲輪、南側には腰曲輪が確認できる。

現在、尾根筋にはハイキングコース（関東ふれあいの道）が城館内を通すように整備されているが、往時は城館の北側を尾根道が通過していたと思われ、雨引山城跡には尾根道を押さえる目的などが想定される。

『大和村史』では、北側約 1.3km に所在する橋本城（0541）を守備していた結城晴朝配下の片見伊賀守晴信が竜蓋山（雨引山）に築いた砦で、天正 14 年（1586）に真壁道無・太田三楽斎により攻め落とされた、としているが詳細は不明である。（越田）



雨引山城跡縄張図 高橋宏和（越田加筆）

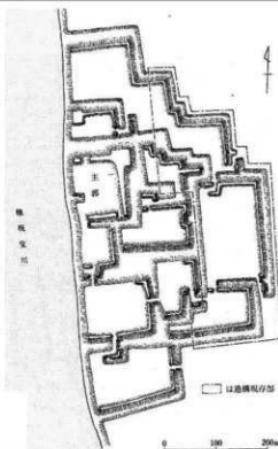
しろやまじょうあと
0552 城山城跡 五霞町元栗橋 現況：宅地、雑種地ほか 別称：栗橋城

地図 53

城山城跡は、権現堂川左岸の標高約13mを測る河岸段丘の縁辺部に位置する。城跡の西半域は、権現堂川の河川改修により削平され湮滅している。

現存する城郭遺構は、東端にあたる堀と土塁である。法宣寺の裏手には、枡形の虎口と「七曲り」と呼ばれる屈折した堀を見ることができる。また、土塁も残存状況は良い。

城は、古河公方の重臣であった野田氏の居城であり、戦後期には古河周辺から栗橋一帯を領していたと思われるが、永禄年間（1558-70）に北条氏照の北関東進出の拠点となつた。その後、天正18年（1590）豊臣秀吉の小田原征伐後に廃城となつた。（大谷）



城山城跡縄張図 藤井尚夫
(『図説中世城郭事典!』より転載)

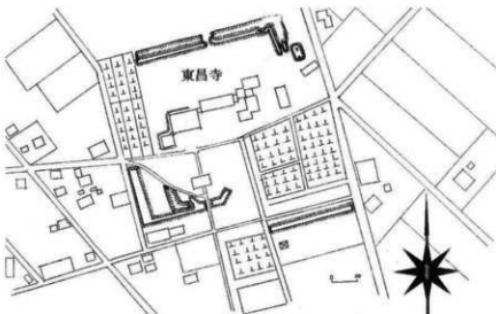
さんじょうあと
0553 山王山城跡 五霞町山王山 現況：寺院

地図 54

山王山城跡は、利根川右岸の標高約11mを測る河岸段丘の縁辺部に位置する。周囲の水田面との比高差は約2mを測る。現在の東昌寺境内に城郭の遺構を確認することができる。

山門の西側には堀跡と思われる窪みがあり、さらにその外側には土塁状の高まりが残されているが、比較的旧状の堀と土塁を残すのは、本堂の裏手（北側）にある。高さ約3mを測る土塁とその外側の堀がほぼ直線的に東西に延びる。この土塁と堀は、東隅で南に折れるが後世の改変により失している。

城主については不明であるが、永禄年間（1558-70）の北条氏照書状には「山王山」、「山王山衆」などの名前が出てることから、北条氏の拠点となっていたことは明らかであろう。（大谷）



山王山城跡縄張図 余湖浩一（『続茨』より転載）

ながいどじょうあと
0554 長井戸城跡 境町長井戸 現況：神社、宅地ほか 別称：長井戸遺跡群 地図 54

長井戸城跡は、利根川の支流である宮戸川の左岸、南に開口する谷津の標高 16m を測る台地上に位置する。

城跡は、長井戸遺跡群のほぼ中央部、現在の長井戸香取神社の境内域に堀と土塁が社殿を囲むように残存する。

天文年間（1532-55）には、この長井戸城に居城した菅谷左京なる人物が小山氏から攻められて、天文 23 年（1554）には稻尾城（0557）とともに降伏したとも記される。

築城時期、廢城など城の盛衰については未詳である。（大谷）



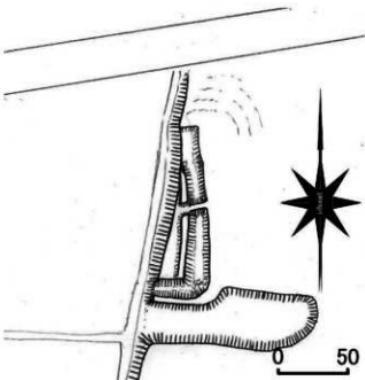
長井戸城跡縄張図 余湖浩一 2021.10

たむかいじょうあと
0556 田向城跡 境町長井戸 現況：山林、水田 地図 54

田向城跡は、利根川の支流である宮戸川の左岸、南に開口する谷津の標高 16m を測る台地縁辺部にあり、長井戸遺跡群の南西部、長井戸城跡（0554）の南西約 500m に位置する。

現状は、城跡の南に東西に走る横堀と城跡を囲むかのように東側に堀と土塁が残るだけである。城の主要部は、早くに削平された西側一帯に及んでいたものと思われ、その規模・様相は不明である。

長井戸城との位置関係から稻尾城（0557）とともに出城として築城された可能性も考えられる。（大谷）



田向城跡縄張図 余湖浩一 2012.10

ゆだじょうあと
0558 弓田城跡 坂東市弓田 現況：ゴルフ場、雜種地

地図 62

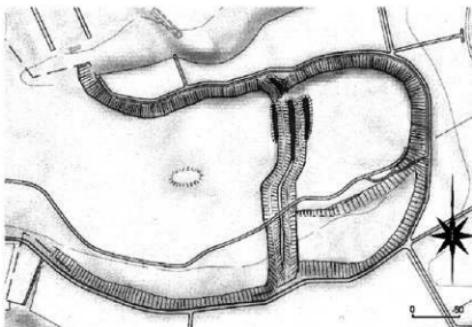
弓田城跡は、西仁連川に流れ込む小支流の右岸で、東に開口する樹枝状の谷津の中腹部、半島状に突き出た標高17mを測る台地の縁辺部に位置する。

現状は、ほぼ全域が開発行為を受けているが、北、東、南の三方を水田（沼沢）面とする天然の要害である。比高差は約6~9mを測る。

『岩井町郷土誌』によれば、舌状台地の先端部を二重の堀により区画し、土塁が築かれたという。曲輪は、約2mの比高差をもって北と南に分けられる。

戦国期の築城と考えられるが、城主とされる伊勢守備中守についての詳細は不明である。

（大谷）



弓田城跡縄張図 余湖浩一 2021.10

おおとりやかたあと
0559 大鳥館跡 坂東市逆井 現況：宅地、山林、畑地 別称：大鳥遺跡

地図 54

大鳥館跡は、西仁連川右岸の標高約18mの台地上で、西仁連川の支流に開析された北東に開口する谷津の東側の台地縁辺部に位置する。水田面との比高差は、約5mを測る。

試掘調査により、空堀の一部が確認された。上幅3.6m、底幅1.6m、深さ1.4mを測り、堀底は平底で断面形状は逆台形を呈する。

現在も遺跡地の北側に土塁と空堀の一部を見ることが出来る。かつては、屋敷地の周囲を土塁と堀が巡っていたといわれているが詳細は不明である。

逆井城（0560）とは谷津を挟んで西に対峙するが、城主や時期などは不明である。

（大谷）



大鳥館跡縄張図 余湖浩一 2021.10

さかきいじょうあと
0560 逆井城跡 坂東市逆井 現況：公園 別称：飯沼城

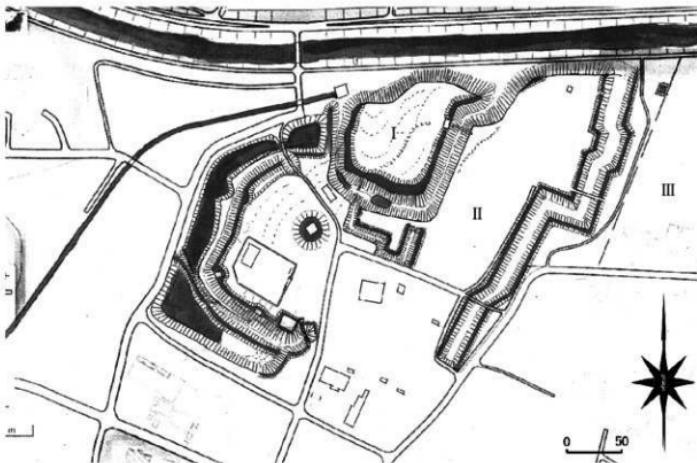
地図 54

逆井城跡は、西仁連川右岸の河岸段丘上、標高約 18m を測る縁辺部に位置する。低地の水田面との比高差は、約 8m を測る。

昭和 57 年（1982）から 8 次にわたる発掘調査が行われ、櫓門をはじめとする遺構が確認された。また、平成 2 年（1990）からは史跡の整備事業が行われ、現在では多くの復元建物を有する城址公園として整備されている。

曲輪 I は、台地先端部で西仁連川を背にして深さ約 4m、幅約 6m の堀と土塁に囲まれている。また、曲輪の南には小規模ながら角馬出も造られている。この曲輪 I を囲むように曲輪 II が広がる。曲輪 II は、東側に屈曲した二重土塁や横矢、西～南側は水を引き込んだ水堀、舟溜まり（船着き場）がある。さらに、曲輪 II の東側にも空堀を有した曲輪 III が存したと伝えられるが、現在は確認できない。

逆井城は、室町期に小山義政の 5 男、常宗が築城し、逆井を名乗ったことにはじまるという。その後、天文 5 年（1536）に北条氏の軍勢に攻められ、以後、北条氏の北関東進出の拠点となる。境目の城として多賀谷氏、結城氏、山川氏などと対峙しその重要性が認められていたことは、発掘調査での築城に関する高度な技術導入を垣間見ることで知ることができる。（大谷）



逆井城跡縄張図 余湖浩一 2021.10

こまよせじょうあと
0561 駒寄城跡 坂東市山 現況：畠地、宅地ほか 別称：駒寄柿沢遺跡 地図 55

駒寄城跡は、飯沼川右岸の標高約19mの河岸段丘の縁辺部に位置し、現在は南流する西仁連川によって段丘が分断され、島状の独立丘陵状を呈する。東側の低地水田面とは、住宅地を挟んで約10~11mの比高差を測る。

城跡は、西側の長大な曲輪と南北方向の堀切で分けられた東側の小規模な曲輪から構成される。この堀切は、深さ3mほどで横矢掛けとなっている。西側の曲輪は、現状で何らの施設は見られずほぼ平坦である。東側の曲輪には土塁と虎口が認められるが、主郭とするには問題がある。

空堀や土塁、横矢掛けの存在からは戦国期の所産と思われる。城主は未詳であるが、逆井城(0560)と弓田城(0558)とを結ぶ中継的な位置にあることから、逆井城の支城であるとの伝承もある。(大谷)



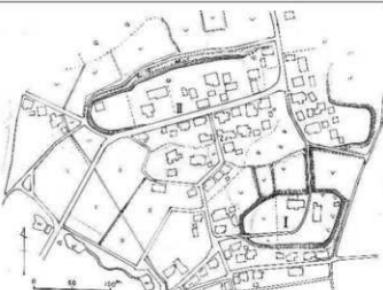
駒寄城跡縄張図 余湖浩一 2021.10

おおののこうじょうあと
0562 大生郷城跡 常総市大生郷町 現況：宅地ほか 別称：馬場遺跡 地図 62

東仁連川左岸に面した標高15mほどの台地上に位置する。大生郷天満宮のある独立丘も天神山城跡と呼ばれる出城とされる。城跡の南および西一帯は、往時は沼沢地であり、要害の地と考えられる。

第I郭は100m×60mほどの方形をなすが、後に大生寺となった後、小学校敷地となつたためか、遺構はまったく認められない。第II郭とは北東部で長さ60mほどの土橋状の陸橋でつながるが、これは後世の改変と思われる。第II郭を東西に貫く道に沿った集落は、字名「宿」という。

第II郭北側の西から入る谷戸部に並行して、宿の裏手にだいぶ埋まっているが横堀が認められる。ただし、台地上を土橋状の陸橋から北方向に延びる道路での堀は終わっているが、元来は東側の谷戸部まで延びていたのではなかろうか。戦国末期には、南進を図る佐竹氏方の下妻城(0500)の多賀谷氏と、小田原北条氏の軍事支援を受けた下総北部の領主たちとの戦闘は激化している。大生郷天満宮のある独立丘も北条氏政によって、城として取立てられたと伝承されている。(遠山)



大生郷城跡縄張図 遠山成（稻葉修氏縄張図を参考、google mapsを基にした）

0563 弘経寺城跡 常総市豊岡町 現況：寺院、墓地 別称：寿龜山遺跡

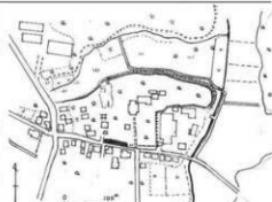
地図 62

ここは、応永21年（1414）嘆讃^{のりまつ}真^{まこと}著によって開山された浄土宗弘経寺の建つ地である。東方600mには羽生城跡（現法輪寺、0576）がある。東・北・西および南側半分を低地で囲まれ、亀の甲羅のようであることから「亀島山」を山号としている。このような要害の地に位置し、本城跡の西側近くを南北に通る街道は、鬼怒川右岸に沿って北へは大生郷、古間木、蔵持、向石下方面に伸びる交通の要衝でもあった。

そのため、天正5年（1577）頃、北条氏繁の飯沼城（逆井城、0560）入城により、飯沼をはさんで対峙する佐竹氏

方の多賀谷氏との間に、常総市一帯で戦闘があり、多賀谷の軍勢がこの地を陣所に取り立てたとされる。多賀谷氏の撤退の後、北条氏によって弘経寺は焼き討ちされたといふ。

その後、江戸時代初め、第2代將軍秀忠の娘千姫により再興されている。土壘状の遺構もこの時築かれたものか。現状では、南端となる山門道沿いに土壘状の遺構が全長30mほど残る。東西および北側は低湿地が回り、これは多賀谷氏によって築かれた可能性も考えられる。今後の考古学的調査に期待したい。また、南方のみに土壘を入れれば、防御態勢は整うので、多賀谷氏によって築かれた可能性も考えられる。今後の考古学的調査に期待したい。（遠山）



弘経寺城跡縄張図 遠山成一 2021.10
(国土地理院地図を基にした)

0564 大塚戸城跡 常総市大塚戸町 現況：畠地、宅地、山林、工場敷地

地図 62

東仁連川の右岸の標高20m弱の台地上に位置する。城跡の東方は、かつては「古（小）谷沼」と呼ばれる沼沢地であり、南へ2.2kmのところに内守谷城跡（0571）がある。両者は舟で行き来できたものであろう。

城域は広く、台地を南北に掘り切って「二の丸」、さらに「オヤシキ」という小地名が城跡北東部の現在果樹園となる一画に残っている。右概念図でいう「三の丸（侍屋敷）」に該当する部分である。「二の丸」と「三の丸」の間は、民家の裏に土壘と空堀の残欠が北北西方向に延びている。また、「二の丸」の西端には北側と道路が中断するあたりに土壘と空堀が一部残る。南半分は道路と畠によってほとんど壊されており、右概念図の旧状を残していない。主郭となる「本丸」は、東西方向に堀と土壘で防御し、一部に二重土壘が残る。主郭の東と南側は、東仁連川のため台地先端部が少し削られている。

大規模な縄張をもつが、いたって簡素であり、兵力の駐屯のためにこうした造りになったのではないかだろうか。北条氏の入部した後の守谷城（0767）を防衛するために、菅生城（0565）と本城に北条氏が手を入れたという近世の戦記物の記述も、あながち無視できないかもしれない。（遠山）



大塚戸城跡概念図
(『水海道市史』より転載)

城跡の東方はかつて古谷沼と呼ばれる沼沢地であり、そちらに突き出した標高 20m ほどの台地上に立地する。谷津田をはさんで東方 700m の地点に、内守谷城跡（0571）がある。両城は舟で行き来できたと思われる。

2006 年に主郭部を除いてほぼ全面調査を行い、船着場の可能性がある深堀と小田原北条氏の影響下で増強されたと考えられる敵堀（繩張図の「推定敵堀位置」で示した箇所）や角馬出（敵堀の東側の小区画）、横矢掛けの虎口等が検出された。発掘前までは畠地等になっていて、ほとんど跡形がなかったが、堀跡と伝えられる箇所から実際に堀跡が検出されている（堀は埋め戻されたので、繩張図で推定位置を示した）。また、深堀の付近には「お舟畠」「お舟かくし」という小地名が残っており、古谷沼から鬼怒川を経て香取内海にわたる広域の水運との関連が想定される。

第Ⅰ郭は、城山と呼ばれる長軸 100m ほどの独立丘で、第Ⅱ郭（発掘前は第Ⅰ郭の北西側とされた）とは 50m ほどの幅をもつ堀で隔てられる。ここからは、発掘により障子堀が検出されている（繩張図の「障子堀出土位置」）。第Ⅰ郭は藪に覆われていることもあって全面の把握は難しいが、平場の造りは造作が甘いように思われる。なお、第Ⅰ郭の南端部の腰曲輪状の平坦面から「橋の礎石」が出土していることである。また、同じく西北部は古谷沼の入り江に面していて、菅生の集落から約 1km 離れていることからみても、町場や街道を抑えるというよりは、水運に関連する城郭としての性格が強いと考えられる。

天正 5 年頃には、飯沼城（逆井城、0560）に北条氏繁が入部したことにより、佐竹方の多賀谷氏の軍勢が先兵（「下妻衆可為先勢」、「北条氏繁判物」『大久保文書』）として南下し、緊張状態となっている。そのため、北西 1.8 km に並んで位置する大塚戸城（0564）とともに、北条氏による改築をうけていることは間違いない、前述の発掘による敵堀の検出と角馬出の発見など、北条氏や同氏の関連した城郭によくみられる技法もそれを裏付けよう。

城主は「天正 9 年高野山連判状」（『相馬当家系図』）に載った菅生胤貞と考えられる。胤の通字から、守谷城（0767）に拠った千葉氏一族の相馬氏の庶流とみてよい。同連判状を見ると、守谷城の相馬氏は、高井（取手市）に高井胤房を、筒戸（守谷市）に筒戸胤文を、大木（同前）に大木胤清をそれぞれ入れている。また、興味深いことに、横瀬氏（由良氏）も名を連ねている。

台地側にある妙見社の小祠は、城主菅生氏が、千葉氏一族の相馬氏の分かれであることを示している。（遠山）



菅生城跡繩張図（復元図） 遠山成一
稲葉修氏原図に余湖浩一氏の図を参考にして加筆

いし しげじょうあと
0566 石毛城跡 常総市本石下 現況：神社、宅地

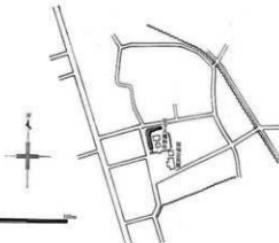
地図 55

鬼怒川中流左岸の標高 18m ほどの自然堤防上に位置する。八幡神社が宇御城であるので主郭と考えられる。市街地化が進んだため、城の構造はまったく不明であるが、明治期の「迅速測図」に描かれた自然堤防の東側に鬼怒川に沿うように流れる小河川（現状ではコンクリート護岸工事済）を、天然の外堀に使っていた可能性があろう。

「迅速測図」には、鬼怒川左岸の自然堤防上に「佐倉道」が宇都宮方面に延びている。八幡神社の南方約 700m の地点には、明治期の時点では道路がクランク状に屈折する樹形が認められる。これより北が本石下の旧町場（石毛城の城下集落）であろう。

戦国期には、下妻の多賀谷氏が豊田郡へ侵攻を始めるが、その経路の一つはまさにこの佐倉道であったはずである。本城跡は、佐倉道を南下する多賀谷氏の抑えとして、機能していたと考えられる。

城主は石毛氏（常総市大房東弘寺蔵「薬師如来像胸内墨書銘」に天文 21 年（1552）に石氣次郎五郎が載る）と思われる。（遠山）



石毛城跡実測図（『石下町史』より転載）

むこういし しげじょうあと
0567 向石毛城跡 常総市向石下 現況：寺院境内、宅地

地図 55

鬼怒川中流右岸、石毛城跡の対岸にある標高 20m ほどの微高地上に位置する。位置関係からも、石毛城（0566）の支城として築かれたことは首肯できる。かつては鬼怒川の流路は向石毛城の西側を流れしており、旧河道との段差を防御に使っていたと考えられる。

現状では、法輪寺の西側に土塁が一部残る程度であるが、『石下町史』によれば、堀と土塁の組み合わせとなっており、南北に台地を分断する形であったとされる。また、法輪寺北側には空堀があって、北側の台地と完全に分離していたとされる。同じく東側にも土塁と空堀が一部残っていたようだ、居館の可能性を指摘している。そうであるとすると、方一町（約 100m）の屋敷が想定される。

文明年間（1468-87）に石毛城の支城として機能していたとされるが、『同町史』でも指摘しているが、台地を分断する 200m におよぶ堀と土塁は、戦国後期の多賀谷氏との抗争の時に造作されたものとみられる。その頃には南方の独立した「峰（弾正台）」の台地まで取り込み、「西館」を含む城域だった可能性が考えられる。（遠山）



向石毛城跡実測図
(『石下町史』より転載)

ふるまぎじょうあと
0568 古間木城跡 常総市古間木 現況：工場用地、宅地

地図 55

鬼怒川に続く古間木沼（大沼）を北に臨む、樹枝状に浸食された標高19mほどの台地に位置する。現状は城主子孫とされる方の工場用地となっている。本城跡は東・西・北を自然の谷で防御され、北に向かって突出した舌状台地に、南端に土塁を築いている。かつては台地を二重の堀切で防御していたとされる。

城主として伝えられる渡辺氏は、摂津の渡辺の津を本拠とした渡辺氏の流れを汲む、水運に長けた一族であろう。「石塚文書」にある永正16年（1519）9月3日付渡辺新兵衛尉宛「足利高基感状」は要検討文書とされる。しかし、高基は小弓公方足利義明を叩くため、結城氏・菅谷氏・羽生氏ら常陸の軍勢を率いて東京湾に面した椎津城を攻めた。水軍を率いての合戦であったとされる。とすれば、羽生氏とともに本城主渡辺氏をこの渡辺新兵衛尉にあてることも、あながち無理ともいえないであろう。（遠山）



古間木城跡実測図 (『石下町史』より転載)

よたじょうあと
0569 豊田城跡 常総市本豊田 現況：水田、畑地、河川敷

地図 55

現状は、水田・畑地と小貝川の河川敷となっていたり、また宅地化していたり、まったく遺構は確認できない。元々、本城は同川右岸標高17mほどの自然堤防上に立地していたものと思われる。城跡の北西には、同じく自然堤防上に本豊田の集落がある。北から上宿・新宿・北宿・内宿と続く。内宿の東に隣接して中城の字名が残るので、家臣団の集住地である内宿を含め、中城・内宿地区を域域とみてよい。

また、上宿・新宿地区の西には大道西の字がある。古代および中世の幹線道を意味する大道があることから、小貝川の自然堤防上に沿って主要街道が通っており、本城は水上交通のみならず、陸上交通をも抑える役割を持っていたものと考えられよう。

豊田氏は、平国香の子繁盛の曾孫政幹が豊田氏（石毛氏）を称し、以後、戦国時代まで一族は続いている。

内宿地名をもつ城跡は、常総の例からみると国衆の本拠や交通の要衝にあることが多く、本城も豊田氏の本城ならびに水陸交通を抑える重要な役割を果たしていたと考えられる。（遠山）



豊田城跡付近地籍略図 (『石下町史』より転載)

くらもちじょうあと
0570 蔵持城跡 常総市藏持 現況：神社、山林、宅地、荒地

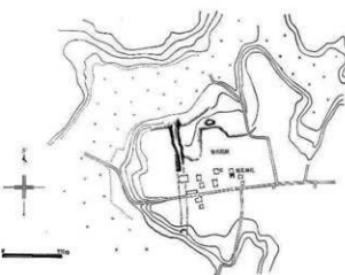
地図 55

北・西・南の三方を往時は沼地に囲まれた、西側に向かって突出した舌状台地に占地している。谷戸を挟んだ西側台地上には、親鸞の東国布教最初の寺院である淨土真宗大高山願牛寺がある。また、本城跡の南西 900m に古間木城跡（0568）があり、両城は舟で行き来ができたと思われる。

遺構が残っていたとされる台地先端近くの堀跡（『石下町史』第二編第五章第一節）は、道路を挟んで両側は、宅地と畠地となりまったく現認できない。北側も宅地化が進んでいるが、山林中に堀と土塁が認められる。

香取神社の東方 200m ほどには、觀世音堂と阿彌陀堂があり、台地上には古くから集落が展開していたと考えられる。

城郭としての性格は、往時の沼地に向かって構えられており、水上交通に長けた一族（古間木城の渡辺氏などのよう）が抱えていたものではなかろうか。ここからは鬼怒川水系に接続しており、常総内海（香取内海）へも通ずる。豊田氏の麾下にあったかのような一族の持ち城ではなかったか。（遠山）



蔵持城跡実測図（『石下町史』より転載）

うちもりやじょうあと
0571 内守谷城跡 常総市守谷 現況：神社、畠地、宅地

地図 69

内守谷城跡は、標高 15m ほどの台地縁辺部に位置する。北方は東仁連川に流れ込む小谷沼排水路のある低地となる。往時は低湿地であり、水路で 2.2 km ほど北に位置する大塚戸城跡（0564）と連絡がついたものと思われる。また、菅生城跡（0565）は 800m 西に位置しており、本城とは密接なつながりがあったと考えられる。

香取神社の本殿背後には土塁状の高まりが残るが、城の土塁かどうかは神社によくみられる仕切りの土塁か判断は難しい。しかし、台地北端となり、沼地側からの攻撃に対する防御となっていることから、城郭にともなうものと判断したい。

戦国末期には、守谷城（0767）に入った北条氏が菅生城跡を改築した可能性が高く、本城も北条氏の勢力下に入ったものであろう。しかし、城跡というよりは、台地上に展開する字本郷周辺の集落を領有する領主の屋敷（館）程度であったと考えられる。なお、本郷集落は谷戸が東側と西側双方に入り込み、南方を木戸等で封鎖すれば独立した空間を構成できる。

（遠山）



内守谷城跡縄張図 遠山成一

みじょうあと
0573 実城跡 常総市水海道元町 現況：公園ほか 別称：御城、水海道城 地図 62

実城跡は、水海道城とも呼ばれている。現状は人工河川八間堀川の掘削によって、城城が大きく削れられてしまい、一部、実城公園となる。市街地化が進んでおり、城城の確定は困難である。

実城とは、近世城郭でいう本丸に相当し、中世には文書に登場し、当時から使われていた語句である。第2郭を「中城」、さらに「外城」といい、これらは城跡にともなう字名などで残る場合がある。本城に関しては実城の地名のみ残っているが、第2郭やそれ以外の曲輪があった可能性も考えておきたい。つまり、実城だけの単郭の城ではなかったということである。今後の発掘調査等を待ちたい。なお、1949年の空中写真からは、県立水海道第二高等学校の東南東直近に、周囲とは異なる区画の水田（畑）と、北側に隣り合って細長い堀状の区画も認められる。

本城の城主は、戦記物ではあるが、田村大膳のちに弾正とされ、戦国末期に下妻の多賀谷氏に攻められ、多賀谷方に下っている。そして、北条氏と激しく戦ったとされる。田村氏は鬼怒川に面したこの地におり、水軍を操ったと軍記物にもあるが、その可能性は高い。

なお、現在、県立水海道第一高等学校のある亀岡の地に支城があったとされ（亀岡報国寺周辺）るが、こちらも遺構はまったく認められない。（遠山）



実城跡位置図（国土地理院地図を使用した）

はにゅうじょうあと
0576 羽生城跡 常総市羽生町 現況：寺院、畠地、宅地 別称：羽生館 地図 62

東に鬼怒川を臨む自然堤防上の微高地に位置する。現状は法藏寺の敷地となっている。同寺のある西方は3~4mほどの段差をもつて道路面と接している。東方は鬼怒川の旧河川敷であったろうか、河岸段丘状となっている。このため南北を堀等で隔絶すれば、屋敷として独立した平場ができる。実際、同寺敷地北西角はほぼ直角に削られており、現状の道が堀跡の可能性があろう。東西の敷地長は80mほどとなるが、南北は現状では不明であるが、方形居館と考えられる。

城跡から鬼怒川までは250mほど離れているが、その間に遙らものはなく眺望がきく。水運に関わる城跡とみてよい。

永正16年(1517)9月、古河公方足利高基は、下総国小弓(千葉市中央区)に入って独立した勢力をふるうようになった弟義明に対し、常陸・下総の軍勢を率いて、その背後にあたる椎津(市原市)を攻撃した。その軍勢に羽生氏がいて、高基より感状を得ている(『常総文書』)。従来は、行方郡の羽生氏とされていたが、文書の伝来は岡田郡横曾根村(常総市)の羽生氏であり、本

城との関連が考えられる。(遠山)



羽生城跡縄張図 遠山成一(国土地理院地図を基にした)

たてじょうあと
0578 館城跡 常総市豊岡町 現況：寺院、畠地、宅地

地図 62

鬼怒川の旧河道跡が南から西を取り巻く安養寺の位置する台地は、現状では鬼怒川の流れにより大きく台地東側を削り取られている。小さく島状に残る台地の西側に旧横須賀河岸の石碑が建っている。旧河道は東方向（水海道橋本町方向）に蛇行していたようで、安養寺のある台地はもっと面積が広かったものと思われる。

安養寺の寺伝によると、元弘3年（正慶2、1333）2月に、横曾根城主羽生氏経が開基となって淨土宗文秀院の名称で創建されたという。羽生氏は羽生村や横曾根村の地頭とされ、初めは羽生城（0576）に居を構えたとされる。寺伝にいう横曾根城（0575）とは本城の600mほど上流、同じく鬼怒川右岸に位置する、現在、製糞工場の建つ段丘上にあったとされる。横曾根城跡と羽生城跡は、同じく鬼怒川右岸にあり、約1km離れている。以上のことから、羽生氏は初め羽生城跡においており、その後、横曾根城、そして館城と本拠を移したと考えられる。『常総文書』には「羽生氏は今渡辺氏と称し」といるとあり、水上交通に長けた渡辺氏の一族で、羽生を名乗ったのではなかろうか。（遠山）



館城跡縄張図 遠山成一
(国土地理院地図を基にした)

ほうおんじょうあと
0579 報恩寺城跡 常総市豊岡町 現況：寺院境内

地図 62

現在は、報恩寺は茨城県道134号線（鴻野山豊岡線）沿いの東側にあるが、明治期の『迅速測図』では、だいぶ現在と様相が異なっている。同図によると、134号線に該当する道は本寺の南で、左右に食い違いで分岐して北上していない。「報恩寺村」の集落が本寺（同図では報恩寺の名称ではない）の周辺に形成されている。

寺伝によると、報恩寺は、報恩寺の第一世となる性信らが親鸞を京より招き、親鸞は岡田郡横曾根（現常総市豊岡）の無住となっていた真言宗大乗寺をもらい、うけ、念佛道場にしたとされる。これが報恩寺のはじまりである。そして、親鸞は東国を去るにあたり、性信にこを託し、以後性信は横曾根門徒と呼ばれる集団を指導した。性信は建治元年（1275）に89歳で入寂し、墓は本寺裏手に設けられている。報恩寺は、はじめ真言宗の寺院であったという伝承は、このことの反映であろう。

戦国時代（寺伝では慶長年間）になって、下妻多賀谷氏と下館の水谷氏との争いで本寺は兵火にあい、法灯は江戸の上野（上野報恩寺）に移ったとされる。陣が本寺に設けられたものであろう。なお、明治の迅速測図では、現在の道路状況とは全く異なっている。（遠山）



報恩寺城跡位置図
(国土地理院地図を使用した)